



ふれあい

財団法人日本医療機能評価機構認定病院
DPCⅡ群
地域医療支援病院
地域がん診療連携拠点病院
臨床研修指定病院



【もくじ】

新病院長の宮田です。2018年新病院長であいさつ

アドバンス・ケア・プランニング-これからの治療やケアに関する話し合い-

沼宮内地域診療センター・紫波地域診療センターのご紹介

初期臨床研修を終えて

がん放射線治療看護認定看護師のご紹介

当院ホームページ、リニューアルのおしらせ

編集後記

病院長 宮田 剛 ……2

前院長 望月 泉 ……3

沼宮内地域診療センター長 菅原 隆 ……4、5

紫波地域診療センター長 小野 満 ……4、5

副院長 高橋 弘明 ……6

がん放射線看護認定看護師 似内 美紀 ……7

事務局次長兼業務企画室長 吉田 朗 ……8

広報委員長(小児外科長) 島岡 理 ……8

【行動指針】

1. 良質な医療の提供
2. 優れた医療人の育成
3. 地域医療機関への診療支援
4. 救急医療の充実
5. 災害医療の体制整備
6. 臨床研修体制の充実
7. 健全で効率的な病院経営

基本理念

高度急性期医療を推進する県民に信頼される親切であたたかい病院

※広報誌「ふれあい」は1,800部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

新病院長の宮田です

2018年 新院長ごあいさつ

岩手県立中央病院長 宮田 剛

南から桜の便りも聞こえてくる季節となりました。2018年4月より望月泉前院長の後任として病院長を拝命しました宮田剛（みやたごう）と申します。

着任にあたり簡単な自己紹介をさせていただきます。北海道留萌に生まれ苫小牧で育ち、札幌の高校を経て東北大学に入学するまで約20年間を北海道で過ごした道産子ですが、岩手県とのかかわりは、医学部卒業後、岩手県立磐井病院での初期研修が最初でした。その後、東北大学第二外科教室では食道外科学、外科代謝栄養学を研究分野とし、医師派遣などを担当する医局長業務に携わりながら岩手県立中央病院の輝かしい躍進を外から眺める立場でした。平成26年7

月より当院に赴任してからは、消化器外科長、医療安全管理部長、副院長としてやりがいを持って従事させていただいております。学生時代は、水泳、バスケットボール、ラグビーで青春を謳歌しておりましたが、最近では、加齢による体力低下を感じ、また年老いた両親を見るにつけ高齢者を取り巻く社会環境の問題点も、医療者としてだけでなくひとりの生活者として実感しているこの頃です。

時代とともに病院に求められるものは変化しています。社会の高齢化は、ひとりで数多くのご病気をかかえる患者様の増加をもたらす一方、医学知識や技術が高度になるに従って、医療の専門分化が進み、一人の医師が何から何まで行うことが難しい時代になってきました。命を救う病院と病後回復を専門とする病院、あるいは終末期の緩和的医療の専門と機能分担が進んできており、その中で当院は「高度急性期病院」という選択をしました。

日本人の死因として最も多い「がん」に関しての最新の治療を緩和的ケアとともに提供できるように、狭心症、不整脈など循環器疾患、また脳梗塞をはじめとする脳神経疾患に対しての最高の治療を提供できるように体制を整備するなど、あらゆる救急要請に「24時間断らない医療」を実践すべく常に体制を整えております。この機能が果たせるのも実は盛岡市内、岩手県内の他医療機関との良好な連携があったことであり、各方面のご協力に感謝申し上げます。

青森県に次いで東北で2番目に人口当たりの医師数が少ない岩手県においては医師の確保、育成も優先順位の高い課題です。当院本体の機能を堅持しつつ岩手県内地域診療支援を行うことも当院ミッションとして継続しています。また研修教育施設として伝統ある当院は、総合的実力を身に付けた医師を数多く育成して参りましたが、今年度からはさらに新専門医制度が開始となりますので、初期研修を終えた働き盛りの医師が次に進むべき専門医教育課程も整備して、岩手県内に活躍の場を提供しています。

患者様、ご家族、また近隣の医療機関の皆さまから本当に必要とされる病院として今後も改善努力を継続してまいりますので、どうぞこれまで同様、ご指導、ご協力をいただけますようお願い申し上げます。

アドバンス・ケア・プランニング

—これからの治療やケアに関する話し合い—

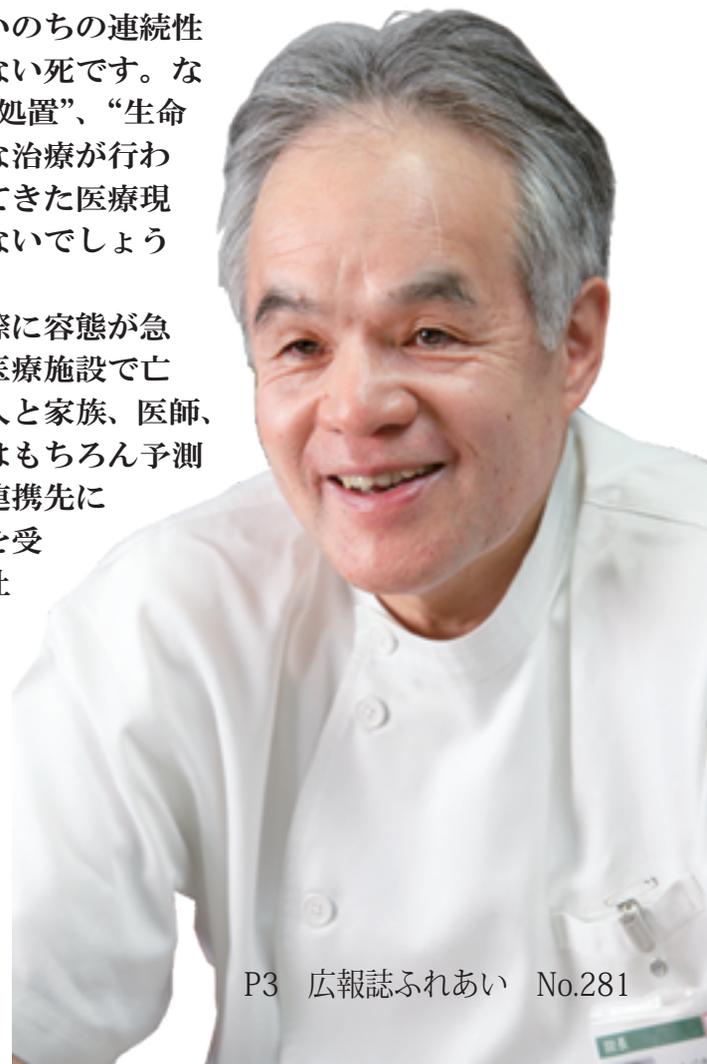
前岩手県立中央病院院長

望月 泉

「看取り」とはもともとは、「病人のそばにいて世話をする」、「死期まで見守る」、「看病する」という、患者を介護する行為そのものを表す言葉でした。「平穏な死」、「お迎えが来た」といったソフトな別れのイメージがあり、「緩和ケア、終末期ケア」と密接な関係があります。高齢化社会を迎えて、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれています。「いのちの終焉は畳の上で家族に見守られて終わりたい。」と多くの日本人は願っています。これからの治療やケアについて話し合うことは大切です。あなたは、「もしものこと」を考えたことがありますか？人はみな、いつでも、命に関わるような大きな病気やケガ（事故）（いわゆる危篤）になる可能性があります。命の危険が迫った状態になるとまわりに自分の考えを伝えることができなくなることがあります。治療やケアに関する考えを、あなたの大切な人と話し合っておくと、もしもの時に、あなたの考えに沿った治療やケアを受けることができるようになります。万が一のときに備えて、あなたの大切にしていることや望み、どのような医療やケアを望んでいるかについて、自分自身で考えたり、あなたの信頼する人たちと話し合ったりすることを「アドバンス・ケア・プランニング—これからの治療やケアに関する話し合い」といいます。これらの話し合いは、もしもの時にあなたの信頼する人があなたの代わりに治療やケアについて難しい決断をする場合に重要な助けとなります。

死を迎えるに当たり、身体的な生命の終わり（脈がなくなった、呼吸が止まった、瞳孔が散大した）は誰もが目に見える形の現象であり、「看取り」とは残される人、愛する家族、友人がその人と共に歩んだ全人生を看取ることです。看取られる人は苦しさから解放されますが、残される人はそれを乗り越えて生きていかなければなりません。ここに、いのちの連続性があります。病院での死は異常な死、本来あってはならない死です。なぜなら病院は助けるために全力を尽くす場であり、“延命処置”、“生命監視装置”が装着される場合が通常です。過剰で不必要な治療が行われている可能性があり、さまざまな延命治療を推し進めてきた医療現場は自然で穏やかな死への道筋を見落としとしてきたのではないのでしょうか。

患者さんが自宅で最期を迎えたいと思っけていても、実際に容態が急変すると家族が動揺し救急車を呼んでしまい、結果的に医療施設で亡くなるというケースもよくあります。在宅看取りには本人と家族、医師、看護師の連携がきわめて重要で、医師からは現在の状態はもちろん予測される身体の変化のようすの説明を受け、状況に応じた連携先についても整理しておきます。必要なのが本人と家族が死を受け入れる「心の準備」です。死は医療の問題ではなく、社会の問題で繰り返される人間の文化です。地域ぐるみで助け合い、医療や介護がかかわり、行政がサポートし、社会を維持していく必要があります。これが求められている地域包括ケアのあるべき姿であり、是非とも構築していかなければならないと思います。





初期臨床研修を終えて

平成 28 年 4 月 1 日金曜日の午後 1 時から院長講話、午後 2 時からのワークショップで始まった臨床研修は、平成 30 年 3 月 31 日をもって 19 名全員が修了しました。とても喜ばしいことです。

臨床研修は、国が定めた目標である医療人として必要な基本姿勢・態度の 6 項目を修得し、経験すべき診察法・検査・手技、経験すべき症状・病態・疾患、特定の医療現場等、指定された多くの項目を経験することが必要です。また、32 のレポート作成も求められています。当院ではさらに、院内全死亡症例の検討会での発表や質問、種々のセミナーでの学習、地域病院の健康講演会での講演、各種学会発表を実施することも義務づけています。

出身地も卒業大学も異なる 19 名が研修医として岩手県立中央病院を選択し、2 年間一緒に切磋琢磨したことは今後の一生の大きな財産になるはずです。今後、専門研修、研究等の医学の道で、自らが選んだ目標に向かって突き進んでもらいたいと願っています。



副院長
高橋 弘明



研修医から一言

様々な人と出会い、学び、そして助けられた 2 年間でした。特に 2 年目の夏以降は将来の進路を決める大事な時期でしたが、周囲の助けもあり満足する結果が得られたと思います。常に修行に励み、これから出会う多くの人の助けとなれるよう頑張っけてゆきたいです。

谷村 史人

この 2 年間、中央病院の皆様には大変お世話になりました。気づいたら終わってたくらい、あっという間の充実した研修生活でした。多くのローテート科、救急で学んだ知識と技術を活かし、「何でも診れる」皮膚科医になれるよう精進します。

瀬川 雄一郎

多くの方々に支えて頂き充実した 2 年間で過ごすことができました。感謝の気持ちを胸に、心温かな循環器内科医を目指して日々の診療に励みたいと思います。これからまた岩手で 3 年間、心新たに頑張ります。

泉 聖也

気が付けば、あっという間に 2 年間で過ぎました。何もわからない、できない 2 年前と比べると、多くの方に支えられ、本当に多くのことができるようになったと思います。これからへの希望、不安など色々な気持ちがありますが、この 2 年間の礎として努力を続けていこうと思います。

真貝 勇斗

当院で研修を行った強みを活かして、病態等の目の前の事象だけでなく、全人的医療や助力いただくコメディカルスタッフの業務内容や負担等を念頭に置いた医療を行っていきたいと思います。

道又 大吾

多くの方々に支えられて、大きく成長させてもらった 2 年間であったと同時に、今後の学ぶべきことの広さがどんどん大きくなっていくのを感じました。医師としても人としても成長していけるよう、これからも精一杯努力していきたいと思っています。

及川 剛

がん放射線療法看護認定看護師のご紹介

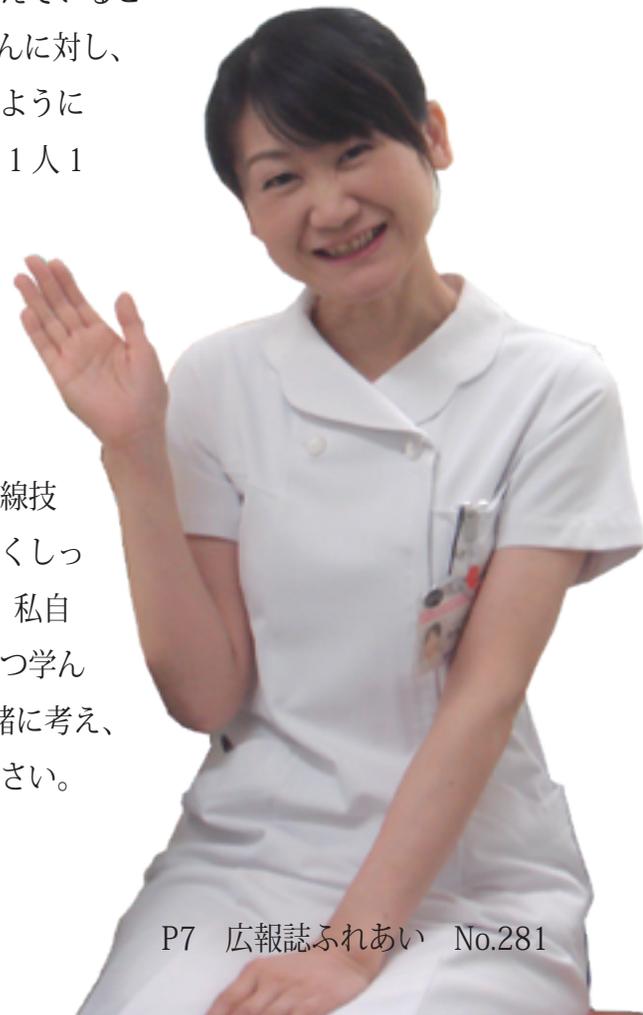
がん放射線療法看護認定看護師
似内 美紀

放射線治療は、がん治療の4本柱の一つと言われる治療ですが、実際の所は、いつどこでどんなふうの治療をしているのか実はよく知られていない治療の1つです。医療ドラマでも、見る機会はほぼないでしょう…。放射線は、実際のところ目に見えず、感じ取ることが出来ないため、治療される患者さんのイメージは様々です。また、一般的に広島・長崎の原爆や、福島原発事故など、「放射線＝怖い」と思う方も多いことでしょう。

私は現在、中央病院の主に放射線治療室に勤務しています。一昨年、九州福岡県にある久留米大学認定看護師研修センターを卒業しました。日本で唯一のがん放射線療法看護分野の教育機関であったため、はるばる九州に長期出張をさせていただきました。同級生は主に九州・中国・四国地区に30名います。全国には250名ほどの仲間がいますが、分野が認められてから7年目の比較的新しい分野であることや、治療施設が限られているため、東北には10名程度、北東北には各県2名と少数精鋭で活動をしています。

中央病院においては、がん患者さんの4人に1人が放射線治療を受けている現状です。放射線治療と言っても、がんを治す根治治療、骨転移などの痛みを和らげる緩和照射、化学療法との併用療法、外科手術の術前照射や、術後補助療法、皮膚や血液のがんへの照射など、髪の毛以外の多種多様ながんに対して治療を行う事が出来ます。その中で、がん放射線療法看護師は何をしているのかといいますと①個別性のあるセルフケア支援②個別性のある有害事象のケアです。実際、今までは放射線治療医師や放射線技師が治療を支える中で、看護師が直接患者さんに関わる事が少ない領域だったと思います。しかし、実際に外来で放射線治療患者さんに関わると、治療から生じる有害事象（副作用）に対し、不安や苦痛を抱える患者さんやご家族も多く、軽減できる苦痛や不安を我慢することが当たり前だととらえていることもわかりました。そして、様々な年代や生活背景を持った患者さんに対し、毎日の通院治療の中、有害事象を予測し、自宅でできるケアをどのように行っていくのか、必要に応じて社会資源の情報提供など、患者さん1人1人に寄り添い、一緒に考えていくことが必要と実感しました。がん患者さんにとって、放射線治療は短い期間の1つの治療です。放射線によって生じる有害事象は避けられないこともありますが、出来る事なら最小の苦痛で、最も効果的に治療が終えられるようにお手伝いができればと日々考え関わっています。

治療室は病院の中で地下の一番奥にある場所ですが、医師や放射線技師、クラークや看護スタッフと共に明るいチームで患者さんを温かくしっかり支えていけるよう、「患者さんファースト」で頑張っています。私自身も患者さんから学ぶことも多く、関連する他のがん治療も少しずつ学んでいます。放射線治療に関してお悩みやご相談がありましたら、一緒に考え、最善のケアをしていきたいと思っていますので、何でもご相談ください。



平成 30 年 3 月より当院のホームページをリニューアルしましたのでご紹介します

広報委員会 (主幹兼事務局次長兼業務企画室長) 吉田 朗

【情報提供の対象】を明確に意識し、必要な情報を検討しました。わかりやすいデザインを心がけました。

①【患者さん及びご家族】⇒『積極的に医療情報を公開』
数字で見る中央病院、高度医療、政策医療、病院実績の一括公開、診療センター、小児救急情報とのリンク、里帰り分娩、部門紹介拡大、医師の写真、相談・お知らせを集約

②【初期研修医・専攻医等】⇒『充実した研修内容を PR』
中央病院の特徴、多彩なセミナー、研修サポート、盛岡という街、初期研修の特徴、初期研修の 2 年間、採用情報

③【地域連携施設】⇒ 顔の見える関係の強化
地域医療連携の基本方針、連携室日より、地域医療研修センターなど

①カテゴリーを見やすく、
シンプルに、迷わない

②できるだけ
ビジュアルに訴求

③落ち着いた配色

④スマホ対応画面の作製

当院の病院運営に当たっては、「Double Winner (中央病院経営 5 ヶ年計画)」という中長期的な経営計画を策定し、「医療の質の向上」と「経営の質」の同時達成を目指して日夜取り組んでおり、今後とも病院のホームページを通じて当院の活動を積極的に紹介していきますので、ぜひご利用くださるようお願いいたします。

編 集 後 記



広報委員長：島岡 理 (小児外科長)

あっという間にもう桜の季節になってしまいました。今年は3月に暖かな日が続き4月に冬に逆戻りしてしまった感がありましたが、4月の寒さが例年通りなのかもしれません。巷には桜の開花宣言がちらほらです。で、桜の話です。桜の種類は国内だけでも 600 種類以上あり、ほとんどが春咲きですが中には春と秋の 2 度花を開く種類もあるようです。日本の桜の 80% を占めるソメイヨシノは日本固有の品種で、エドヒガンザクラとオオシマザクラを交配させたと言われる園芸品種ですが、だからこそ一斉に開花して桜前線と名がついたのだと思います。

ソメイヨシノ (染井吉野) の由来は江戸時代後期に江戸染井村の植木職人が交配してできたといわれており、桜で有名な吉野山にちなんで名付けられたという説が有力です。その花言葉「優れた美人」にふさわしく、花の美しさは満開の時だけではなく散り際の見事さからも日本人の心を魅了します。ところで桜と言えば今でも思い出すのは、高校時代の恩師に「葉桜」というあだ名の先生がいました。出っ歯が目立ち鼻 (花) より歯 (葉) が先に出ているというのがその理由でしたが何だかひどい話です。

さて職場を変わって慣れない人、新人教育に忙しい人、新年度になって体調を崩しやすいですよね。無理をしないでいただきたいと思います。本年度もよろしくお願い申し上げます。



お知らせ 次回の健康講座は・・・

「あなたは認知症を
どこまで知っていますか？」

平成 30 年 6 月 16 日 (土)
14:00 ~ 16:30
プラザおでってで開催します。
入場無料・事前登録不要です。
多くの方々のご参加をお待ち
しています。



岩手県立中央病院
〒020-0066 岩手県盛岡市上田 1-4-1
TEL:019-653-1151 FAX:019-653-2528
<http://www.chuo-hp.jp>

ふれあい No.281 平成 30 年 5 月
岩手県立中央病院 広報委員会

◆委員長 島岡 理

相馬 淳	吉田 朗
吉川 和寛	照井 彰子
下川原 裕見子	城戸 直人
佐々木 貴美子	藤原 綾乃
片岸 久	小笠原 学
岩淵 ひろ絵	大久保 拓也
菊池 莉栄	吉田 奈穂子

ふれあいはホームページでもご覧頂けます。

[岩手県立中央病院](#) [検索](#)



今後の役割を考えながら

2018年沼宮内地域診療センター センター長 菅原 隆

沼宮内地域診療センターは2002年10月に病床数60床で現在の場所に新築移転され、2011年4月より無床化されています。各種医療器械が16年目を迎え、老朽化し更新の時期になっています。それぞれの器械の状態をみながら、診療センターの今後の役割を考えつつ、器械の更新、整備をしていかなければと思っています。予算がなく、なかなか厳しい状況ではありますが、本年3月末にCTの装置を新しくすることができました。また、昨年7月より不在であった内科に昨年11月より千葉寛先生を迎え、現在、常勤の医師は外科1名、内科1名となっています。

医師不足のため、県立中央病院や紫波地域診療センター等より、内科、消化器科、脳神経外科、整形外科、小児科、皮膚科の先生方に応援をいただき、専門医としての診療をしていただきながら、高血圧、糖尿病、脂質異常症などの慢性疾患の“かかりつけ医”としての役割も持って診療しています。また、地域の健康増進のためがん検診にも積極的に取り組んでいます。

当センターは、中央病院のベテランのOBの職員が多く、また、レントゲン技師や薬剤師、検査技師など当院の職員が不在時の応援や食事指導のために管理栄養士にも中央病院から応援をいただいています。入院や対応が困難な救急患者さんは、ほとんどを中央病院にお願いしていますが、いつも快く引き受けていただいています。

以前より、岩手町の開業医の先生方と連携を取りながら運営していますが、より一層、地域の先生方との連携を深め、地域から信頼される診療センターとしての役割を果たしていきたいと考えていますので、引き続きよろしく願い致します。

より深い町民とのつながりをめざし

2018年紫波地域診療センター センター長 小野 満

無床化（病床休止）による運用は、今年度で10年目を迎えております。この間、本院からの診療に加え、各部門からの業務応援で円滑に診療を進めており、関係各位に感謝申し上げます。

さて、昨年8月、紫波町から“高齢者の介護予防事業の実施場所として当センターのリハビリ室及び会議室を使用したい”との申し入れがありました。これは高齢者の心身機能の維持を目的に集いの場を設置し、元気に暮らす高齢者を増やすことを目的としています。この事業は町内3カ所の施設で実施されており、うち1カ所の老朽化が進んだことから当センターに移設したいというものです。

無床化に伴う空きスペースの利用について県立病院事業運営方針では「地元自治体と連携しながら地域医療の確保や福祉提供体制の充実につなげる」としています。これを踏まえて町と医療局経営管理課が協議を進め、本年4月4日開所する運びとなりました。当日の「ふれあいプラザ赤石移転開所式」には、紫波会高橋理事長、羽生紫波町生活部長、小野当センター長、医療局経営管理課中田予算企画担当課長がテープカットを行い、利用を開始しております。

具体的には、毎週水・木・金曜日9時30分から6時間、1日当たり7人をバス送迎し、健康チェックやゲーム、趣味活動、健康体操等を実施するとしています。

無床化以降、人口減少も相まって外来患者数が減少する中、当センターと町民のつながりも若干疎遠になっているような感じがします。このような状況の中で今回のとりくみは、ハード面だけではなく、ソフト面でも当センターの存在をアピールできる機会であり、当センタースタッフの成人病予防講話などを実施したいと考えております。引き続き、本院から当センターへの支援をよろしくお願い致します。

